

ペスときょうだい

小川未明

青空文庫

風の吹くたびに、ひからびた落ち葉が、さらさらと音をたて、あたりをとびまわりました。空はくもつて、木の枝がかなしそうにうごいています。急にお天気がかわりそうでした。

「雪がふると出られなくなるから、ちよつと、となり村まで用たしにいつてくる。」と、父親は、身じたくをしながら、いいました。

「その間にぼくは、外につんであるまきをかたづけしておこう。」と、兄の太郎がいました。

「あまり暗くならぬうちに、お父さん、かえっていらつしやい。」と、弟の秀吉はいました。

「ご飯はんがにえたら、お母かあさんにあげて、先さきに食たべておしまい。」
 と、父親ちちおやは、戸口とぐちで兄きようだい弟ちゆういに注意ちゆういして、空そらをながめていま
 したが、

「寒さむさがちがうから、今夜こんやは雪ゆきだろう。」と、いいました。

このとき、パスは犬小屋いぬごやでねていました。いつもなら、とびだ
 してきてあとをおうのですが、どうしたのか、音おともたてなければ、
 姿すがたも見みせませんでした。

「パスをつれていかないの。」と、太郎たろうがいました。

「ねているなら起おこさずにおいておやり。」と、そのことばには、
 やさしみがありませんでした。そして、もう父親ちちおやは、門もんの方ほうへ歩あるいて
 いたのでした。

兄弟きょうだいは、しばらくそこに立たつて、父親ちちおやのうしろ姿すがたを見みくりましたが、見みえなくなると、

「ペスのやつ、気分きぶんがわるいのかな。」と、弟おとうとの秀吉ひできちは、小屋こやをかえりみながら、まず口くちをひらきました。

「なに、おうちやくなんだ。きげんのいいときはしかつてもついでくるが、わるいときはよんでもきやしない。」と、兄あにの太郎たろうは、いまいましそうにいいました。

「しかし今日きょうは、気分きぶんがわるいのだろう。」と、秀吉ひできちはペスの弁護べんごをしました。あまり兄あにがおこっていたからでした。

「だってそうじゃないか。お父とうさんはペスの恩人おんじんなんだぜ。犬いぬころしにつれられていくところを、お金かねをやつてたすけなさった

んだ。こんな小さいうちに命をとられるのは、かわいそうだといつて。」と、太郎がそのときのことを思い出していうと、

「ほんとうにうちへきたときは、ころころとしてかわいらしかったね。」と、秀吉もうなずきました。

「そのご恩をわすれては……。」

「パスはありがたく思っているんだよ。家じゆうで、いちばんお父さんになつているだろう。」

「それならこんな日にこそ、おともをするのがほんとうなのだ。」と、兄は口ごごとをしながら、前のあき地につんであつたたきぎを一本ずつとりあげて、長いのをのこぎりでひき、太いのはなただわって、てごろにできあがったのから、なわでくくりはじめま

した。また弟は、炉に松葉をくべたり鉄びんをかけたりして、夕飯うはんのしたくをしていました。お母さんがかぜをひいてねていられたので、いいつけられた用事ようじをしているのでした。北風きたかぜの吹ふくたびにかさこそと、まどの外そとでは木の葉はのとぶけはいがしました。

そのとき、力ちからのこもるちようしで、ドント、ドント、ドント、ナミノリコエテ……と、兄あにがはたらきながら、出船でふねの歌うたをうたっているのが聞きこえました。

そのうちに、だんだんとあたりが暗くらくなりました。

「秀ひでちゃん、まだご飯はんにならない。」と兄あにが外そとから声こえをかけました。

「いま、お母かあさんにあげたところだ。」

「ちらちら雪ゆきがふつてきたよ。」

「えっ、雪ゆきが。」と、弟おとうとはこう聞きくと、すぐに戸口とぐちまでとびでま

した。灰はい色いろの空そらをあおぐと、やわらかな白しろいものがおちて、つ

めたく顔かおにあたりました。

「ごらん、あちらの山やまも森もりも、みんなはやまっ白しろになつたから。」

と、兄あにはせわしそうにたきぎを勝手かってもとへはこびながら、いいま

した。やがて仕事しごとがおわつて、兄あには流ながしで手てをあらつていと、

土間どまのかたすみで、パスが、弟おとうとのあたえた飯めしを食たべているのが目め

に入はいりました。

「どこもわるくないのに、ずるいやつだ。」と、太郎たろうはしたうち

したのです。

夜よるになると兄きょうだい弟だいは、ともしびの下したでくりをやいたり雑誌ざっしを見たりして見ました。ふけるにつれてヒユヒユと風かぜがつのり、パラパラといつて、吹雪ふぶきがまどにあたりました。

「お父とうさんは、暗くらくておこまりだろう。ぼく、とちゅうまでむかえにいこうか。」と、秀ひできち吉きちが外そとへ耳みみをすましながらいうと、

「いいえ、むかえにいかなくても、だいじょうぶです。お父とうさんは知しり合あいがおありですし、おまえのほうがしんぱいですから。」と、つぎの間まにねているお母かあさんがいわれました。

「ペスがついていけばよかつたんだ。」と、兄あにはまたくりかえしました。

「どこかわるいんだよ。さつきお宮みやの境けい内だいへしいの実みをひろいにいったとき、呼よんだけれどこなかったのだ。いつもならよろこんでとんでくるのに。」と、秀ひで吉きちはパスをかばうつもりでこたえました。

「それなら、なにも食たべられそうもないのに。」と、パスが音おとをたてて、ご飯はんを食たべている姿すがたを、兄あには思おもい出だしたのでした。

くりのこげるにおいが、つめたいへやの空くう気きへひろがりました。けれど兄きょうだい弟だいは、外そとのあらしに気きをとられるので、おちつかなくったのです。兄あにはなんと思おもったか、立たちあがると入いり口ぐちへ出でて、戸とをあけました。弟おとうともじつとしていられずついてくると、パスもそばへやってきました。

「ペス、お父とうさんをむかえにいくんだ。」と、太郎たろうは命令めいれいしました。

「いくら犬いぬでもわからないだろう。」と、秀吉ひできちは反対はんたいしました。

兄あにはそれに耳みみをかたむけないで、むりにペスを寒さむいやみの中なかへおいだしました。赤あかと白しろの敏びんかん感けんな毛色けいろの動物どうぶつは、しばらく、なにを考かんがえるか、吹雪ふぶきの中なかでふるえてみえました。

「早はやくいけ。」と、はらだたしげに兄あにはいつて、手てあらく戸とをしめたのです。

秀吉ひできちが戸とをあけたときは、もうペスのかげはそこになかったのです。ただしきりとふる雪ゆきが、すきまをもれるともしびにてら

されたばかりでした。

「どこへいったかな。パスはもうおらないよ。」と、秀吉は炉
 ばたへもどると兄を見ました。兄は下をむいて、黙っていました。
 それから三十分もすぎたころです。戸口でだれか雪をはらう音
 がしました。

「お父さんだ。」と、秀吉は出むかえました。

「パスはいきませんか。」と、太郎が聞きました。

「いや。どうして。」と、父親はふしぎがりました。

「むりにお父さんをむかえにやったのです。」と、太郎がいわ
 けしました。

「どの道かわかるまいが、どこへいったかな。」と、父親は考

え顔をがおしました。

「もうかえないよ。」と、急にきゆう秀吉ひできちは悲かなしくなつて、声こえをふるわせました。

「そんなことはあるまい。小犬こいぬではないからな。」と、父親ちちおやはわらいました。

秀吉ひできちは父親ちちおやのことばで、いくらか安心あんしんしました。そして明日あしたになれば、お母かあさんはおおもきられるとおおもしやるし、雪ゆきの上うえをペスとあそばれると思おもうと、うれしかったのでした。

けれど、太郎たろうだけは、ペスのことがさすがに気きにかかるとみえて、戸口とぐちに立たつて口くちぶえをふいたりしました。

「どこへいくものか。もう寒さむいからやすんだがいい。」と、父ちちお

親やは先さきに座ざを立たたれました。続つづいて兄きようだい弟だいもへやへ入はいつて、
 床とこに入はいりました。弟おとうとはすぐおとうとにねむつたけれど、兄あには容易よういにねむり
 つかれず、吹雪ふぶきの中なかをさまよつてゐるペスの姿すがたを想そうぞう像ぞうしました。
 真夜中まよなかごろでした。秀吉ひできちはふと目めをさますと、兄あにをおおこさな
 いようにそつと床とこからぬけだして、犬小屋いぬごやへいつてみました。中なか
 はがらんとして空からだったので、せつかくわすれた悲かなしみが、また
 新あたらしく全ぜん身しんをしめつけました。しばらく、なきだしたくなるの
 をこらえて立たつてゐると、遠とおく石いしをころがすような海うみの鳴なり音おとが
 きこえました。

その夜よのあけがたのこと、ゴトンと、なにか雨戸あまどへあたる音おとが
 しました。

「ペスかな。」と、兄あにはすぐはねおきました。二人ふたりともちようど目をあけて、ペスのことを思おもっていたので秀吉ひできちは、

「にいさん、ペス。」と、聞ききました。

「いや、風かぜの音おとだ。」と、兄あにはしおしおとまた床とこへもぐりました。しばらくすると、

「夜よがあけたら、ペスをさがしにいこう。」と、兄あにはひとりごとのようにいいました。

「兄にいさん、ぼくもいつしよにいくよ。」と、秀吉ひできちはいいました。

このとき、兄あには兄あにで、かわいそうなことをしたと後こう悔かいしたし、弟おとあせうとは弟あにで、自分じぶんの力ちからのたらぬばかりに、とりかえしのつかぬあやまちをおかしたと、良り心ようしんにせめられたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「未明新童話集」太平社

1954（昭和29）年7月

初出：「幼年クラブ」

1948（昭和23）年1月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年5月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ペスときょうだい

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>